

平成 26 年度 特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

「英国スタディ・ツアー」参加者報告書

日程：平成 26 年 9 月 2 日（火）～9 月 10 日（水）



特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

〒411-0857 静岡県三島市芝本町 7-11

TEL: 055-983-0136 FAX: 055-973-0022

E-mail: info@gwmishima.jp

Website: <http://www.gwmishima.jp>

目 次

1. 概要.....	1
2. 日程表.....	1
3. 地図.....	1
4. 参加者・面談者リスト.....	2
(1) 参加者：学生・社会人	
(2) 同行指導者	
(3) 面談者	
5. 報告事項（訪問先別）.....	4
1) Groundwork London—午前の部—（穂山、石岡、太田、大名門）	
2) GroundWork London—午後の部—（岡田、加々美、小林和博、小林勝成）	
.....	7
3) The Conversation Volunteers（近藤、島田、高村）.....	9
4) Groundwork UK（新里、早川、廣瀬、中村）.....	12
5) コッツウォルズ訪問（松原、丸山、山下）.....	15
6) Bikeworks（阿部、筒井、牧）.....	18
7) London Wetland Centre（新井、貴家、三島）.....	23
6. 参加者へのメッセージ（小山善彦）.....	27
7. 講評（渡辺豊博）.....	27

1. 概要

平成26年9月2日（火）から11日（火）まで、グラウンドワーク三島が主催する、「英スタディ・ツアー」が実施されました。本ツアーは、グラウンドワーク UK を始め、英国のNPOや社会的企業への視察と参加・体験を通して、多様な生活現場における問題解決力とコミュニケーション力、実践力を高めるとともに、国際的な交流と見識を高めることを目的とし、実施されました。参加者は、大学生19名、社会人7名の計26名でした。なお、各訪問先や視察を通しての感想などについて、以下の通り、報告書としてまとめます。

2. 日程表

1	9月2日（火）	（11:20 成田空港発 → 15:00 ヒースロー空港着） ホテルロビーにて集合・打ち合わせ	ロンドン泊
2	9月3日（水）	終日：グラウンドワーク・ロンドン…実践地視察	ロンドン泊
3	9月4日（木）	午前：TCV…ボランティア体験 午後：ロンドン自由視察	ロンドン泊
4	9月5日（金）	午前：バーミンガムへ向け出発 午後：グラウンドワーク UK 視察	バーミンガム泊
5	9月6日（土）	午前：ストラフォード・アボン・エイヴオン視察 午後：ポート・オン・ザ・ウォーター視察	コッツウォルズ泊
6	9月7日（日）	午前：パイプリー散策 午後：オックスフォード視察	ロンドン泊
7	9月8日（月）	午前：バイクワークス視察 午後：研修のまとめと参加者ワークショップ	ロンドン泊
8	9月9日（火）	午前：湿地センター視察 午後：各人視察	ロンドン泊
9	9月10日（水）	解散（13:30 ヒースロー空港発 → 翌9月11日（木）9:05 成田空港着）	

3. 地図



4. 参加者・面談者リスト（敬称略）

1) 参加者

<学生>

No	氏名	性別	所属
1	穂山 大輔	男	都留文科大学 4年
2	石岡 真由美	女	都留文科大学 2年
3	太田 裕也	男	都留文科大学 2年
4	大名門 佑紀	男	都留文科大学 4年
5	岡田 知大	男	都留文科大学 3年
6	加々美 汐里	女	都留文科大学 3年
7	小林 和博	男	都留文科大学 3年
8	小林 勝成	男	都留文科大学 3年
9	近藤 圭	男	都留文科大学 3年
10	島田 裕之	男	都留文科大学 3年
11	新里 早映	女	東京農工大学 2年
12	鈴木 里菜	女	国際教養大学大学院 2年
13	高村 遼太郎	男	都留文科大学 3年
14	中村 菜摘子	女	東京農工大学 4年
15	早川 涼介	男	都留文科大学 3年
16	廣瀬 はづ紀	女	都留文科大学 3年
17	松原 慶彦	男	都留文科大学 4年
18	丸山 彩香	女	信州大学 3年
19	山下 瑠己	女	都留文科大学 3年

<社会人>

No	氏名	性別	所属
1	貴家 章子	女	ふるさと上谷沼地域創造塾
2	阿部 裕子	女	立教セカンドステージ大学
3	新井 純孝	男	立教セカンドステージ大学
4	笠原 康次	男	立教セカンドステージ大学
5	筒井 雄二	男	立教セカンドステージ大学
6	三島 澄子	女	立教セカンドステージ大学
7	牧 幸子	女	立教セカンドステージ大学

2) 同行指導者

小山善彦 バーミンガム大学客員講師（通訳）

渡辺豊博 特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長

都留文科大学文学部社会学科教授（引率）

3) 面談者

9月3日（水）訪問先：Groundwork London

・ Terry Sinclair, H&R Manager

・ Nicola Wheeler

・ Caroline Bragg

9月4日（木）訪問先：The Conservation Volunteer

・ Lizzy Kaimakamis, Senior Green Gym Project manager

・ Laurence Clapdrop

9月5日（金）訪問先：Groundwork UK

・ Graham Duxbury, Chief Executive

9月7日（日）特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 シニアアドバイザー

・Dr. Robin Henshaw OBE

9月8日（月）訪問先：Bikeworks

・ Jim Blakemore, Co-Director

9月9日（火）訪問先：WWT. London Wetland Centre

・John Arbon, Grounds&Facilities Manager



5. 報告事項（訪問先別）

1) Groundwork London 一午前の部－（穠山、石岡、太田、大名門）

<Groundwork London 組織概要>

グラウンドワークロンドンとは英国内のグラウンドワーク運動の拠点の 1 つである。グラウンドワーク運動は 1981 年サッチャー政権下で始まった。行政、企業、市民をつなぐパートナーシップ概念を公共政策へと導入し地域再生に大きな力を発揮した。かつて 50 ほどあったトラストが統合され、現在は、15 箇所のトラストが広域拠点として機能している。ロンドンも 10 か所ほどのトラストが存在し、現在は、この GW ロンドンに統一されている。今でも各トラストは活動拠点として機能し、現場に近いところには専門スタッフが常駐し、パートナーシップで環境プロジェクトを実施するスタイルが維持されている。我々が視察した Queen Caroline Estate や Housing improvement Program もそうしたプログラムの事例である。市民同士の間でグラウンドワークが入り、調整仲介を行うことで誰もが納得できる公園づくりを目指した事業だ。集合住宅の各所に設けられた公園はどれもきれいに保たれていた。

<感想>

・都留文科大学社会学科 4 年 穠山大輔

グラウンドワークロンドンは、住民たちのコミュニティ再生への取り組みにおいても目覚ましい成果を残している。団地から、子どもたちが遊ぶ姿を見渡せるように公園づくりを手がけた。この公園は、柵で周囲を囲われており、ゴミ箱・ベンチの設置や遊具には、木材をふんだんに使い、自然のぬくもりや人間味のある設計が心掛けられているのが特徴だ。

また、管理を行政の手を借りることなく、市民自らの力で運営する気概がゴミ箱の設置という定期的な管理を要する設備からもうかがえる。日本の団地においては、当然管理主体は団地内の自治組織であることは共通するが、柵の整備や自然を活用した遊具の設置は見られるケースは少ない。住まいと公園の位置関係も子どもの安全を考える上で適切ではないだろう。このように、主体者は誰なのかという根本的な問題を突き詰め、そこから公園の役割や機能を考えるアプローチ方法を、私たちは学ぶべきである。

担当者は、この事例はたまたま公園であることであって、最終的な目標は住民たちのコミュニケーションや暮らしを活性化させることであると話していた。本来つながりの少ない住民たちに活動への興味を持たせる、何かが始まるという期待感を持たせることが、グラウンドワークロンドンの長期的な目標達成における足がかりだと考えることができる。単発的な取り組みではなく、腰を据えて地域と向き合う姿勢は、日本の行政や住民組織も参考にすべき点である。

一方、課題として挙げられるのは周辺の安全管理問題の強化である。住民たちが家に居ながらにして、公園の様子を監視することができるが、夜間は公園やその周辺に街灯もなく、安全とは言えない環境に様変わりしてしまう点だ。当該地区は、低所得者や移民が住

もう地区である以上、遊ぶ子どもたちへの喚起と街灯設置等の安全管理を徹底したほうがよいと考える。この公園は、住民たちにとって思い入れのある公園であり、職員が多様な住民たちとの合意形成を重ねた苦労がある。このモデルを国内さらには、海外へと応用できるよう努めることもこれからの重要な役割であると考えている。

・都留文科大学社会学科 2年 石岡真由美

産業革命後に各地域は空洞化し、衰退してしまった。グラウンドワーク活動がはじまることで個々の活動もある中でより大きな規模、視野での活動が可能になった。グラウンドワークロンドンには主に貧困地域（様々な社会的な問題を抱えているため）で活動をしている。衰退して問題を抱えた地域での活動は上から教えていくのではなく地域の人と共同で学びながら作っていく。

地域の人たちと関わっていくときにはクオリティ・ダイバーシティ・リスペクトというアプローチの姿勢が重要になる。元からある価値観・文化考えなどを重んじることが大事で、その地域でどういったニーズがあるのかを知る。それにより外からきた「GW が教え、成し遂げた」という感覚ではなく、「自分たちの手で改善し創り上げた」という意識を得てもらうことができる。それが解決の糸口になる。

パートナーシップを形成するために地域の人に自分たちの地域の所有意識をもってもらうことが自立していくプロセスにつながるといった。

・都留文科大学社会学科 2年 太田裕也

都市化や移民政策というのは近代化を進めてきた中で先進諸国が皆同様に臨んできた歴史過程である。しかし、その結果として住宅街の空洞化や治安の悪化といった様々な問題が発生してしまった。こうした問題を抱えた集合住宅というのは、ロンドン市内でも少なくない。公園が麻薬取引の場になったり、周りの住人同士の関係が全くなかったりといった状況は、その地域への住民の愛着を一層薄れさせてしまう。これらのみならず社会において発生した様々な問題に、対処する組織として立ち上がったグラウンドワークは今や英国の地域再生になくてはならない。その手法は自分たちが全てを行うのではなく住民自身による解決を促すことである。

我々が視察した公園も、市民の声を多く反映させていた。遊具の種類から素材に至るまで何度も住宅内の住民らとワークショップを行い、合意形成に努めたという。一言に市民と言っても一人一人の状況は様々だ。「きれいな公園が欲しい」と言っても、子供を遊ばせる公園がほしい市民と非行少年などが居すわらない公共空間を求める市民とでは、どうしても具体的な内容の段階で齟齬が生じてしまう。そこで十分な合意形成を行わないまま計画を進めると、いざ公園が完成したときにその管理に住民の理解協力が得られない場合やそもそも市民が望まなかった形が出来上がってしまう可能性さえある。何が欲しいのか自分たちで話し合うというのは当たり前のことなのだが、なおざりになっているケー

スも多々あった。その点、グラウンドワークの活動は基本的でありつつも革新的だ。中々気づけない「当たり前のこと」に目を向け、自分の環境や周囲との関係を考えるきっかけを提供してくれるように思う。一方、問題点として考えられるのは人間外への配慮である。市民の合意形成をなした上での公園の改造等でも、動植物の生態系にまで配慮がなされているのか疑問に思った。動物の住みかを人工的に作る代替案は存在したがエサや元々の行動範囲を大きく制限しかねない。人間以外ともよりよい「合意形成」を図るべきである。

・都留文科大学社会学科 4年 大名門佑紀

9月3日、私たちはグラウンドワークロンドンが行う「住宅改善プログラム」の実践地の視察を行った。そこは、比較的、低所得者の住民が多い地域で、麻薬の売買などが夜間に行われるなど治安面に大きな問題があり、子供たちは安心して外で遊ぶことのできない環境であった。原因は都市化や移民化政策によって社会に歪が生じ、かつてあった地域コミュニティが崩壊してしまったことにある。そこで、特に貧困住宅地域を中心に、グラウンドワークロンドンが地域に入り込み、住民のネットワークを仲介役となり、再構築し、地域コミュニティを再生していく活動を始めるのが「住宅地改善プログラム」の始まりである。長い年月をかけて地域住民と話し合いを行い、合意形成を行い、どのような公園にしていきたいのかということを中心に行った。そのことによって、地域住民がより多く利用する公園にすることができた。その公園を実際に視察し、グラウンドワークロンドンの職員のお話を伺ってグラウンドワークロンドンの先進性、問題点を感じた。

様々な技術やノウハウを持つ職員がプログラムごとにチームを結成し、それらを共有し、質の高いものを提供し、イノベーションを実践している所に先進性を感じた。それぞれ目標や目的をもって、一つのプログラム事業を行うことで様々なニーズに対応した、革新的な事業展開を可能にしている。一方、問題点は、短期的には地域コミュニティを再生し、公園を維持管理するシステムを維持することは可能であるが、住民の流動性や環境の変化などに対して、中期長期的に維持を行っていく仕組みを構築していくことが難しいことであった。それに対して、定期的なアクションプログラムを行っていく必要があるが、予算やノウハウを確保していくことは難しいというところに問題点を感じた。

最後に、グラウンドワーク三島と比較して、相違点があった。グラウンドワーク三島は、人に見放されてしまった環境問題に対して、同じ問題意識を持つ人たちを巻き込み、他の人たちに様々なアプローチを行い、環境改善活動を展開していたが、グラウンドワークロンドンでは、問題意識を持った住民がプレゼンテーションを行い、より住民主体のプログラムであるという手法であった。



グラウンドワークロンドンの事業で整備された公園



公園づくりのプロセスについて説明を受ける一行

2) GroundWork London—午後の部—（岡田、加々美、小林和博、小林勝成）

<概要>

現在、グラウンドワークロンドンでは、年間 20 億円の収入があり、200 万人の従業員がいる。グラウンドワークの原則は「地域をよりよくする・人々の可能性を改善する（広げる）」というところにあり地域コミュニティに入り、公園を作るなどの「住宅地改善プログラム」や失業者の支援などを行っている。地域コミュニティに入っていく上でコミュニティの人に敬意を払い、コミュニティの人に合わせたものをつくるという基本的な原則、価値観を守り住民自治会との関係を築いて地域の人と学びながら活動を行っている。

実践地の 1 つ「Cheesm's Terrace」は高齢者住宅である。外から見ただけなので自分たちが歩いていないということもあり実感がつかめなかったが、職員によると、住民の高齢者の方とガーデンセンターに行って植える木を選ぶなど、高齢者の方それぞれから意見を募り住民の人に受け入れやすく、理想に合った庭を作った。この庭において大事にした点はアクセス、綺麗さ、安全性、環境面ということであり、幅広い視野で作っていた。

また、他の実践地では住宅団地の間のスペースを利用し公園を作ったが、アクセスしにくい場所であると私有地のように考えられ、公的なお金が出ないため GW が自治体に呼びかけオープンスペースにした。公園を作る上でも住民の意見が取り入れられたり、住民が使いやすいように考えられたりしていて、落書きされたときに自然に消える木のベンチが置かれ、15 年は腐らないように加工がしてある。また、住民からの要望で犬が入ってこないように公園にはフェンスがつけられている。このフェンスには資金の約 7 割が費やされた。

それから、住宅団地を利用して雨水を貯めるプロジェクトが進められ、雨水が落ちてくるところに花壇をつくり、雨水を貯めるのと同時に野菜を育てられるようにする計画がある。グリーンリーフやグリーンガーデンなどを知っている住民はほとんどいないので住民の様子を気遣い、理解を得られるように説明しまずは協力してくれる人から始め、2016 年

春には完成させたいとしている。このように地域コミュニティをよりよくするためにグラウンドワークロンドンでは数多くのプロジェクト地を支援していて、その一つひとつのプロジェクトに充分力を注いでいる。



住民と一緒に作られた公園



花壇や雨水を利用したプロジェクト現場

<感想>

・都留文科大学3年 岡田知広

洪水被害が多発している地域で雨水を地下に貯めるというシステムを開発した実践地を見学し、日本で渡辺先生が行っている雨水浸透弁という取り組みがあることを思い出した。イギリスでも日本でもこのような雨水を貯めるというシステムが、まだ完璧にはなっていないので、これからもっと普及が進んでいけばいいと思った。

イギリスに行って、現地のNPO(GW ロンドン)などを視察して感じたことは、動くお金が全く違うということだ。やはり、NPOが活動するにはどうしても、お金というものが必要になってくると思うが、イギリスでは1回の活動で使用するお金の多くを国などからもらえたりする。これはイギリスにおいてNPOなどの社会的な団体、企業が社会から認められているということであると思った。そして、日本のNPOなども今よりもっと社会から認められて活動を行えるようにするにはどのようにしたらよいかもっと考えていくべきだと感じた。

・都留文科大学3年 加々美汐里

グラウンドワークロンドンを視察してみて1番印象に残っていることは、住民のことが第一に考えられているということであった。プロジェクトを進めることも大事だが、住民との関係を築いていくということに重きが置かれていてプロジェクトの内容も自治会から「こういうことをしたい!」という要望に基づいて行われていた。

グラウンドワーク三島ではそれが実現されていると思うが日本ではまだまだ住民を主役にしたNPOが少ないと思うので、こういった住民が主役のNPOが増えていけば社会的にも認められ、資金も増え地域をよりよくする活動が日本でも行えるようになって感じた。

・都留文科大学 3 年 小林和博

グラウンドワークロンドンを視察して、まず感じたことはグラウンドワークロンドンのネットワークの多さ、公園を作るときに、地域住民や行政などとの交渉の多さに驚いた。日本と違いイギリスは比較的 NPO にお金（補助金など）が入ってくるので、プロジェクトを多く行いやすいと思うが、その一つ一つが地域の住民と一緒に作りつられているなど感じた。いくつか公園を視察したがどこも工夫されていたように感じた。また、日本とは違い、住民一人ひとりが自分の住む街をよくしようとしているのを感じた。そして今回の視察でイギリスの NPO ではどうして多くのお金を集められるのかという疑問が出てきた。

・都留文科大学 3 年 小林勝成

私は国外に出るのは初めてだった。イギリスに行き驚いたのは文化の違いだ。まちを歩いてみても景観だけではなく、人の様子なども見るようにした。夜中なのにずっと走っているバスや、真夜中にやってくるゴミ収集車など疑問や聞いてみたいことがたくさんあった。グラウンドワークを始め様々な方々の話を聞きイギリスの人々の仕事に関する考え方に感銘を受け、日本に今足りない点に気付いただけでなく自分自身の将来についても深く考えるようになった。このイギリスで学んだこと刺激を受けたことを基にこれからの将来に少しでも役立て、活かしていきたいと思う。

3) The Conversation Volunteers (近藤、島田、高村)

(The Conservation Volunteers 組織概要)

1959 年、農村地域の環境改善活動を目的とし、有志の呼びかけによって結成された市民ボランティアグループ。以降、英国全域に広まっていき、現在は約 2000 団体のネットワークと 50 の支部を置く組織となった。日常のボランティア活動として、火、水、土曜日の週 3 回、現場での作業を行うメニューが用意されている。市内にいくつか決められた集合場所に行けば、誰でもその活動に参加することができる。

(Green Gym 概要)

グリーンジムプログラムは、環境改善活動をしながら、体力と健康を向上させることを目的として考えられ、1997 年に導入された。グリーンジムは少なくとも週に一度集まり、1~4 時間のガーデニング作業や環境維持活動を行っている。特徴は、グリーンジムの参加者はすべてボランティアであり、半分以上は過去に環境保全活動に参加したことがない人である。活動は認定されたリーダーが中心になり、決まったカリキュラムのもと活動は行われている。2006 年までに 55 のプログラムを英国中で行い、推定約 6000 人の参加者が募った。2005 年にはチャリティ賞を受賞している。

(当日の活動内容)

グリーンジムの一種の活動として公園の雑木の間伐作業を主に行った。公園歩道の脇の土手に広がる雑木林の中で、背が高く成長し、他の植物の成長を阻害してしまう恐れのある種の木を伐採し、さらにその伐採した木の葉をむしり取り、保存容器に詰め込んだ。これらの葉っぱは6週間発酵させ、公園の横にある動物園の動物の飼料にする。

私たちスタディ・ツアーの学生一行が参加したため、かなりの人数となったが、老若男女問わず様々な層の市民が参加し、共に作業を行った。また、作業だけでなく、途中のティーブレイクやストレッチなどの参加者への心遣いも印象に残った。



作業前、怪我をしないよう丁寧に説明を受けた



作業の様子

<感想>

・都留文科大学3年 高村遼太郎

今回のグラウンドワーク三島による英国スタディ・ツアーは、かねてより興味のある研修だった。自身は海外の渡航経験すら乏しく、英語もままならない。しかし、大学で市民活動やグラウンドワークについて学ぼうちに、イギリスの先進的な活動をこの目で見て、肌で感じてみたいと思い、今回の旅行に参加した。

プログラムを終えた今、自身のとても良い経験になったと感じる。日本も近年は市民活動といった言葉を聞くようになってきたが、イギリスでは英国グラウンドワークを始め有志のボランティアグループ、社会的企業が熱心に活動していた。街並みや文化の古さにも感動したが、そうした先進性は日本も見習える点があるのではないかと感じた。日本という狭い世界での自身の視点が、今回の一連の研修によって広がったと思う。

・都留文科大学3年 島田裕之

実際に活動を通して最も強く感じたことが、活動にとっても参加しやすい環境であることだ。活動開始時、スタッフやボランティアの方は数人しかいなかった。しかし作業が進むにつれていつの間にか参加者が増えてきており、tea break だけではなく、作業中などいつでも多くの人と会話する機会があった。活動自体がアイスブレイクとなったからか、よそ

よそしさなく、初対面とは思えないほど会話が弾んだ。

グリーンジムは健康促進と環境改善を並行して行える良き活動である。深刻化する高齢化社会や地域コミュニティの衰退、施行放棄森林の増加、環境保全など国内の多くの課題に対する一つの解決策にもなり得ると思う。近年ではスポーツジムやヨガといった施設に通う方が増えているが、程よく運動できるだけでなく、「人と繋がることができる」、「地域の自然環境を保全することができる」、「社会的スキルを向上させることができる」など多くの点で差異化が図られており、より多くの方に認知して頂きたい活動であると感じた。

・都留文科大学3年 近藤圭

実際の活動では、私は主に木を切ることを行った。ボランティアに参加することで様々な経験を積んでいくことができるのでボランティア活動が私は好きだ。英国では、市民が積極的に社会のために活動を行っている。今回参加した活動は、集合場所はどこでもよく、移動手段がなく長距離移動が困難な人にとっても参加しやすい。日本でボランティアを行う際は現地集合が多いと考える。アクセスが容易であれば参加者に変化がみられると考える。ボランティアは参加しやすさも大切だと感じた。

TEA BREAK もあり参加者同士で交流ができることがいい。活動で汗水をたらしながら参加者同士の交流を行っていけることは教授の「右手にスコップ、左手に缶ビール」を思い出す。グリーンジョブと呼ばれているこのような活動は、心にも体にもいい活動だ。

グラウンドワーク三島や別の団体の環境保全活動や援農体験活動を行った後は活動場所の変わった姿や成果を見ることで達成感を得て心が晴れる。活動後に現場を見ることでこのように気持ちが晴れるだろう。程よく体を動かすので睡眠もよくとることができるようになるだろう。そのような点から考えて、こういった活動は健康によく、環境のためにも体のためにも参加をし得るものが多くある。この活動を、精神や体に障害のある人や犯罪をしてしまった人にでも行えるような活動であると、そういった人の体や心のトレーニングにつながるし、社会参加の一つの手段だ。BIKEWORKS 等英国で社会的弱者の支援を行っている団体があることがわかった。ボランティアでも社会的に弱い立場である人も気軽に参加でき、社会のために活動を行っていけるものであるといいと考えた。

また、全員で輪になって体操する時間を取り入れている点など参加者一人一人の体のことを考えていると感じた。草原の中でストレッチをする時間は大変気分がよく、英国のボランティアの良さを感じた。

イギリスと日本を比べると、日本は市民主導ではない。イギリス人の人間性について考えると電車内でカップルが抱き合っていたり公園でキスをしていたり、人前でも堂々と行える人が多いと街中を歩いて感じた。日本では、自分を出せないという人が多いということが改めて認識した。自分を出していけることがイギリス人は強い、市民主導社会であるのもそういった人間性の違いがあると考え。人間性の違いの中で、イギリスの自立した地域社会を実現するためにはどのようにしていくのか。市内で何かを行うときに、行政

の判断に従ってだけでなく市民も提案していく必要があるかと考える。リーダーとなる人物や、周りの人物、一人一人が自分の行いたいことを、自信をもって発言できる、人物や環境が大切かと考える。地域は地域に住んでいる人が守っていく、という意識を持っていくことが大切であると考えた。

今回の研修を通して、多くの刺激を受けた。何に対しても強烈で魅力的で興味を惹いた。市民社会や社会的企業、興味のある内容の先進的な事例を実際に見て聞くことができたのは大きい。自分の中で整理して、活かしていきたい。このような素晴らしい研修を計画してくださったグラウンドワーク三島のスタッフの方々、そして家族、親戚、身の回りの多くの人に感謝したい。何かを行う人は周りの人の批判を受けるが、それに負けることなく、自分の信念を持続していくことが大切と気付いた。

4) Groundwork UK (新里、早川、廣瀬、中村)

(Groundwork UK 組織概要)

バーミンガムに位置する英国グラウンドワークの全国連合本部で、1985年に設立された。地域組織であるグラウンドワーク・トラストが取り組む全国的なプログラムの開発、大手企業との連携、政策提言など、中央本部として機能している。グラウンドワーク・UKの担当者より、グラウンドワークの歴史、ミッション、方法論、本部としてのグラウンドワーク・UKの役割、活動、成果について学んだ。

(GWの原点、始まった経緯)

当初マンチェスター、リバプールの産業衰退で問題が発生、自助活動と環境活動のため、相互補完性のアイデアを取り入れていった。1年計画から5年計画、ある地域から他の地域と少しずつ活動を拡大する。例えば、燃料貧乏の世帯をどう助けるか。個々人のポテンシャルを引き出すというものが挙げられる。本部がバーミンガムにあるのは地価の問題もあるが、GWの活動は問題のある地域で行われるので豊かなロンドンの周縁部を大事に、ということでここに設置した。

(現在の活動)

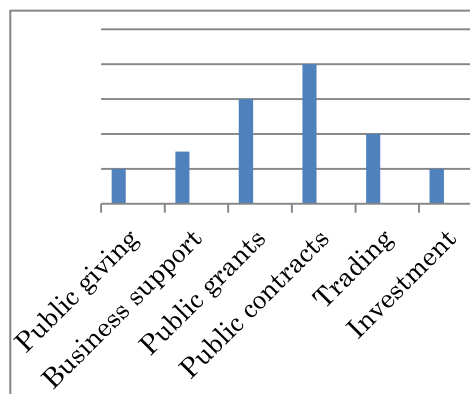
財政カットの傾向があるが、これは政府の目標が借金0であるためである。これにより生まれた格差に取り組んでいる。25万日分の若者の社会活動を行い、7000人が資格取得、4500人がPersonal progressionを果たした。イギリスでは大学出ただけでは就職が難しいことや、落ちこぼれ、不登校などの若者の就労支援必要となっており、取り組みを行っている。

(今後の活動)

収入は右図のようにPublic grantsとPublic contrastが多いが、今後は両端に広げていきたいと考えている。

・Green doctors

独居老人等お金がない人にはない人なりの生活やノ



ウハウ を教える。燃料や水の使い方について。

・ Green Space

30 年前はなかった。自治体のお金はないため、地域住民が地域のことをやる。より広いオーディエンスが必要で、例えば地元企業との創造的パートナーシップを結ぶ。



Groundwork UK 事務所



講義・質疑応答の様子

〈感想〉

・東京農工大学2年 新里早映

私がイギリスのGW運動のお話を伺う中で、一番感銘を受けたのは、1つの活動を通して、より多くの人・世代がそのサービスを楽しむことができていることです。特に若者支援の意識が強く、国や地域の未来を担う人材育成の重要性を改めて実感しました。ただ、こういった活動をそのまま日本社会に取り入れることはほぼ不可能だと思います。やはり、“何が日本と違って、どうすれば日本に応用できるのか”ということを考えなくてはなりません。

そのためには、まず、それぞれの国の歴史的背景をもとに、国民性や価値観を理解する必要がありますと感じました。しかし、一方で、今すぐに取り入れられる要素もあったように思います。それは、地域住民の Emotional attachment (思い入れ) を引き出すということです。日本では、ボランティア＝無償というイメージが強く、地域活動に対するプラスのイメージが定着しにくいのではないかと思います。

そこで、参加者に楽しんで好きになってもらえるような要素を加えていく必要があると思いました。Groundwork UK でお話を聴き、ますますイギリスのこと・日本のことを知りたくなりました。これから日本社会はどうなっていくのか。そして、どういった社会的サービスが求められていくのか、考えていきたいです。

・東京農工大学4年 中村菜摘子

日本でもコミュニティの崩壊はよく叫ばれているが、私にとっては、それが普通の状態である。いろいろ言われても動こうとしないのは、それによって困ったことがないからなのだと思う。今回GWUK本部の方にお話を伺って感じたことは、昔は当たり前にあったコミュニティだが一度壊れたり、新しい場所に一から作っていくというのはとても大変で、安定した状態というのは貴重で大事にしなければならないということだ。

おそらく今は特に問題を感じていないがこの先10年、20年経つと問題はさらに表面化し深刻なものになるのであろうから今から考えていかなければならない。また、欧米を見習って作ってきた社会なので今後もこれらの国の行く先をしっかりと見続けなければならないと思う。

・都留文科大学3年 早川涼介

グラウンドワークの本社であるグラウンドワークUKのお話を聞いた感じたことは、グラウンドワーク三島とやっていることはほとんど変わらないのではないかとというのが第一印象だった。どちらかと言えば、グラウンドワークUKの方が社会的起業に近いことを多く取り入れている気がした。中でも、感心したことは若者をボランティアとして利用し、グラウンドワーク側は人手を補い、若者は経験を積み、就職を有利にできるという相互関係はとても有益だと思った。そういったことをグラウンドワーク三島でももっと取り入れていきたいなと感じた。

・都留文科大学3年 廣瀬はづ紀

若者の支援に力を入れているのが印象的だった。日本でも今後を担っていく若者の育成に力を入れていなくはないが、高齢者社会においてはどうしても医療制度や保険制度の充実などが必要となり、若者の支援が日本ではそれほど感じられないと思う。就職についてもイギリスの場合はグラウンドワークUKなど次につなげていくステップとする場があるのが大切だと思う。

私自身、就職活動をする時期に差し掛かり今後の職業について考える機会が増えてきたが、いろいろな経験を積んでおきたいと考える。大学在学中も様々なことに挑戦してはいるがスキルアップにはまだまだ足りていない点を多く感じる。興味の範囲が広いということもあるが、自分に自信をつける意味でもグラウンドワークUKのような若者の支援に力を入れているところが身近にあると安心でき、社会に出る若者にとっても社会の向上にとっても良い点だ。このようなことが日本でもできれば良いと思った。

5) コッツウォルズ訪問（松原、丸山、山下）

訪問先：9/6(土) ●ストラトフォード・アポン・エイヴオン
●ボート・オン・ザ・ウォーター
7(日) ●バイブリー
●オックスフォード

（訪問先概要）

コッツウォルズ散策

農場と石造集落が織りなす景観が美しいコッツウォルズ地方を訪問。農村環境の保全と利用の在り方に触れ、グリーン・ツーリズムを体験。今回は、シェイクスピアの生まれた町ストラトフォード・アポン・エイヴオン、街に川がせせらぐボート・オン・ザ・ウォーター、イングランドで最も美しい村とされているバイブリー、学問の町オックスフォードを訪問。

（訪問先の詳細と感想）

◆ストラトフォード・アポン・エイヴオン



道沿いを歩いていくとボートがたくさん船舶している水路が現れ、その奥には緑の芝生の公園が存在。年間 500,000 人の観光客が訪れるこの町は、シェイクスピアの生誕地であり、店も多く立ち並んでいるため、この日も多くの観光客でにぎわっていた。小さな町だが、水路を中心に景観がきれいに整っている様子が印象的であった。（丸山彩香）

◆ボート・オン・ザ・ウォーター



人口約 4000 人のこの町は、中心に川が流れ、その周辺にいろいろなお店が立ち並んでいた。お店の正面が川に向けられており、まさしく川を中心としたまちづくりを行っていることがうかがえた。川の水は非常に透き通っており、多数の水鳥を見ることができた。また、水深は浅いため、裸足になって川遊びをしている人たちもおり、三島市にある源兵衛川を思わせるような川であった。川沿いは芝生で、橋や住宅が石造りになっているため、自然と建造物が上手く調和していた。 (山下瑠己)

◆パイプリー



この場所で元グラウンドワーク **Oldham&Rochdale** 事務局長 **Dr.RobinHenshaw** 夫妻と合流。この地域はかつて森であったが、中世期に羊が放牧され羊の毛皮を収入源とし地域が活性化した。しかし、産業革命と共に若者が都市に流出し地域は衰退してしまった。1950年代にナショナルトラストがこの地域を購入した。小さな町ではあるが、当時の職人の家が今も住居として利用され、素晴らしい家や教会が、町を魅力的に演出していた。環境を守るための一部に制限があり、観光客の側もそれを守っているから長年管理ができ、観光地として成り立っているのだと感じた。 (松原慶彦)

◆オックスフォード



英語圏でもっとも古い大学である、オックスフォード大学の拠点となっているこの都市は、老若男女問わず多くの人々でにぎわっていた。膨大な面積をもつオックスフォード大学の建築物そのものが、町の景観を形成している印象を強くうけた。 (山下瑠己)

6) Bikeworks (阿部、筒井、牧)

(概要・目的)

バイクワークス(Bikeworks)は、2006年に株式会社として設立。翌年には店舗を構え、ビジネスを開始した。バイクワークスは単なるバイクショップとしてのビジネスだけでなく、社会的企業として、様々なコミュニティベースのプログラムやトレーニングも行っている。彼らの使命は、サイクリングを通して、社会的弱者の人生を前向きに変えることである。今回はバイクワークス本社を訪問し、店舗、リサイクルセンター、トレーニングセンターを視察し、バイクワークスの創設者であるJim Blakemore氏から、バイクワークスの成立ちと経緯、そして事業概要について伺った。

(バイクワークスの成立ちと経緯)

バイクワークスの創設者のJim氏はバイク愛好者であり、以前ケンブリッジで貸自転車屋の仕事をしていたが、バイクを活用して社会的事業を起こしたいと考えた。自転車を介して、社会的に弱い立場の人々の経済的自立支援のために雇用の機会を設ける、ソーシャル・ビジネスである。

パートナーと2人で、2006年に少額の資金でスタートさせた。Jim氏のバイク業界の経験とパートナーの大学論文のテーマがマッチし、ロンドン社会の底辺にいるアルコール中毒者、麻薬中毒、受刑後一般生活に馴染めず、再度刑務所に戻った人や失業者等経済的な貧困層を対象に、人生の立ち直りの手助けを行うことを目指している。最初は自宅での営業であったが、翌年にはロンドンで店舗を構えることができた。

4団体がサポートするイギリス政府の35万ポンドの雇用研修プログラムなどをうまく活用して事業は急成長を遂げていった。事業の80%は自前で、自治体から助成金や民間から資金提供を受け、大手銀行のバークレーズ銀行から5年間の融資も受けることができた。

立ち上げてから8年、2店舗をオープンしてビジネスは急成長を遂げている。急成長に合わせ人員が32名に増えた。25万ポンドの事業収益を得ているが、人件費で収益は減少し、リスクな面も抱えている。競合する新車販売の大型店の存在が雇用状態を悪化させている面もある。政府・自治体の補助金制度がカットの時代となり、持続可能なビジネスを目指す、順風満帆ではない。

(バイクワークスの事業概要)

1. リサイクルセンター (事業) について：

リサイクルセンターでは、不要になったバイクを一般からの寄付や自治体から引き取り、修理・チューニングして高品質の中古バイクとして販売している。年間約2,000台を販売。また個人が当リサイクルセンターにバイクを持ち込み、修理することも可能である。その時にはパーツ類の交換があり、収益源となっている。また中古バイクの廃棄に伴い発生する鉄・アルミニウムは廃棄物として処理されていたが、それを止め、リユースしている

ことも社会的事業の一つである。収益が無くても社会的事業を達成することが重要である、再三強調された。

2. トレーニングセンター（事業）について：

トレーニングセンターでは、材料となるバイクは一般からの寄付で、不要なバイクを募り、一旦、解体し、部品ごとに分けておく。それを組み立てることによって、技術を習得できるよう工夫された、2日間のバイク組み立てコースプログラムへの参加を呼び掛ける。参加グループごとに1台のバイクを組み立て完成させる。参加対象者は、犯罪履歴者、アルコール中毒者、麻薬中毒者、貧困層等の社会的に弱い立場の人達である。彼らにバイク修理技術を習得させ、再雇用に繋げることを目的としている。特に犯罪履歴者が1/3もいることに驚かされた。以下のプログラムから成り立っている。

STEP 1：Readiness Check。Are You Ready? であり、技術習得に意欲があり、働く強い意志を持っているかのチェックをインタビューで行う。約300～350名/年の参加申し込みがある。

STEP 2：レベル1 技術習得コース。2日間での組立作業実習。これを卒業するとレベル1技術を習得することになる。約200名が卒業し次のSTEPへ行く。

STEP 3：レベル2 技術習得コース。メカニカル技術の習得コースであり、この技術を取得することで定期的な収入源となり、将来の自立した生活設計も立てやすく、経済力も向上するのを狙いとする。約100名が卒業し、その内50名がフルタイム雇用についているとのことである。パートも含めて55～60%の雇用率とのこと。

トレーニングプログラムでのルールとしては、「必ず約束を守ること」「期間中症状がでたら、スローダウンすること」「整理整頓すること」「人を信頼すること」である。

トレーニング担当として5名で企画・運営している。また卒業後の職探しも行って支援している。

ヨーロッパにはヨーロッパ共通の職業技能資格制度がある。技能1から技能8までの段階に分かれ、技能1：中卒以下 技能2：中卒以上 技能3：高卒以上 技能4：大学1年 技能5：大学2年 技能6：大学3－4年 技能7：修士 技能8：博士となっている。バイクワークスのトレーニングでは、ヨーロッパ共通職業技能資格の技能2段階までの取得をサポート。

Jim氏は好きなバイクと人との関わりを武器に社会的、経済的に苦しむ社会の底辺層の働く意欲のある人に自らがバイクを組み立て技術を取得させ、スキルアップすることが経済力を高める手段として有効であると考え、まずは本人のやる気を尊重することを基本としている。さらに働く意欲の高い人を次のステップに誘うステップ・バイ・ステップのトレーニングシステムは、相手の人格を尊重し対応する信頼関係を築くことで、参加者のエンパワーメントを高め、自立の強い足掛かりにつながる。時間は掛かるが一度身についた技術力は、貧困から脱出する大きな武器となってくる。

現金による支援では一時的な飢えや寒さをしのげるが、その日暮らしの生活の改善にはつながらない。他に頼らず、自分の将来の生活を考え、基本的な最低限の生活を彼らの働く意欲を高めることで、将来の生活基盤の確保をもめざす力を引き出そうとしている点が素晴らしいと感じた。日本でも不要なバイクを自治体が回収、自治体職員や委託された高齢者の人々が整備し、安価な値段で販売するシステムはある。

中古バイクを整備、販売するNPOの例もあるが、バイクワークスの様な社会の底辺の経済力のない人々の経済的自立支援に職業技能を習得させるシステムではない。Jim氏のバイクワークスの取り組みはその点に特徴がある。

(現在の事業状況と今後の展望・事業戦略)

バイクワークスを2006年に正式に立ち上げて、3年間で3倍以上の売上販売実績をあげ、急激なビジネス成長・発展をして現在に至っている。会社が大きくなるとビジネスはexcitingで dynamicであるが、リスクが大きくなる。Scale backして今持っているものを小さくすることも時には必要であると言う。

大きくなればなるほど、組織等で問題が発生し苦労されているとのこと。今は自治体からの補助金がカットの時代となり転換期にきている。現在32名のスタッフを雇用しているが、収益を上げるためには彼らの給料をカットする必要があるが、カットはしない。彼らの人生を考えての決定である。今後は補助金に頼らない事業構造にして持続可能なビジネスを目指している。またバイク産業はまだまだ成長産業である！ことを強調された。

今後の事業戦略としては、社会的使命として昨年やってみた2つの事業を新しい収益事業として考えている。ひとつは障がい者向けCharity bike rideプログラムであり、もうひとつはTeam buildingプログラムである。

①障がい者向けCharity bike rideプログラム・ビジネス：

Jim氏はバイク販売事業以外に人との関わりにも重点を置き、経済的に不安定な人々、身体的な障害のある人、心に不安を抱えている人々、性別や年齢を超え、多様な人々にサイクリング本来の楽しみを伝えるCharity bike rideプログラムを提案。ロンドンオリンピックに向け、障がい者を対象に精神面のサポートも実践した。

このCharity bike rideプログラムは、障がい者らも参加できるようなバイクを使って旅行する企画を立てて実施する。そのバイク旅行には医療スタッフも同行する企画である。3年間かけて、障がい者用の研修も手掛ける他、現在、一人の車いす使用者を雇用しているとのこと。将来的には今あるバリアを解消し、さらに雇用につなげたいとのこと。

②Team buildingプログラム・ビジネス：

上記トレーニングセンター・雇用研修プログラムで養ったバイク組立作業のノウハウや経験をもとに、グループでのバイク組立作業を通してチームワークやチャレンジ精神等を育成する研修プログラムである。カンパニーや団体グループ向けの民間ビジネスにより収益構造を改善していきたいと考えている。

(感想)

通りに面したバイクワークス本社の店舗の正面はさほど大きくなかったが、店を通り抜けると中庭があり、もう一つの建物がありました。そこはバイクの修理場で、様々な工具が用意してあり、誰でもその工具を利用してバイクを修理してよいと言う。店舗の地下は、バイクの組み立てや修理に関する技術を習得させるトレーニングセンターがありました。奥の深い建物構造は、”Are you ready?” ”Welcome”と、意志のある人は大歓迎で資格が取れ、就労のチャンスを与えるコースを提供していると、説明して下さったバイクワークス代表の Jim 氏の懐の深さを象徴しているようでした。

「バイクが好き、人が好き！」 Jim 氏の言葉が心に大きく響きました！

大好きなバイクを通して、サイクリングの楽しさやサイクリングが健康的であるかを人々に伝え、感動を与えるプログラムを提供し、失業中の若者たちには就労のチャンスや自立する希望と自信を付けさせることに、いかに情熱を注いでいるかを、静かに語る Jim 氏の眼はキラキラ輝いていました。人を引き付ける魅力を感じました。

そして、身体的にハンディのある人も、サイクリングを楽しめるように、相談しながら自転車を改造することもしている。社会的に弱い立場にいる人達の側に立った支援による社会貢献こそ、誰もが自らの人生を楽しみ、社会活動に参加している連帯感を育み、地域の活性化や失業や貧困がもたらす社会問題解消への道なのだと思います。

”Why do we do? What do we do for people?”と自問しながらも、「私は多くの人がしたくない仕事をしているが、私は、やりたい仕事をして仕事を楽しんでいます。」と言う言葉は、強い使命感と情熱が溢れ大変印象的でした。

チャリティとソーシャル・ビジネスは方向性が異なり、自分が何をすべきなのか先を見据えた目標設定と現状をしっかりと見つめた結果、ビジネスモデルの確立を第一にして、次のステップに進みたいが、今はまだその時期ではないと彼は語った。身の丈に合った事業展開を先を急がず、多くの人と人との関わりをバイクを基軸に据えながら、理解者の輪を広げつつ進めていきたい。

彼の情熱の源となっているのは、まずは自身の生活スタイル、日々の健康を含め、心が満たされた生活基盤を大切にすることと答えてくれた。彼の気負いのない自然体の姿、揺るぎのない信念、足元をしっかりと見据えた健全な心境が質疑応答を通して、彼の人となり伝わってきた、意義深い視察でした。

今回の研修旅行を通し、様々な市民活動の取組を視察し、いかに地域に根ざした視点で物事を判断するかの重要性に気づきました。

最後になりましたが、この研修を企画された渡辺豊博教授、的確な通訳をして下さった小山義彦氏、参加者のまとめ役、国際教養大学大学院の鈴木里菜さん、グランドワーク三島事務局の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

参考資料：バイクワークス本社の視察 写真



バイクワークスのロゴ



Jim Blakemore 氏から説明を受ける



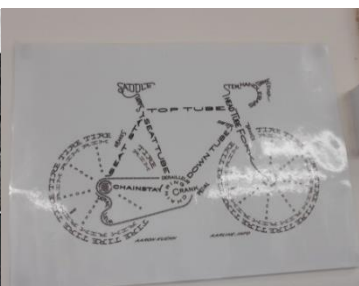
ワークスペースで説明する Jim Blakemore 氏



整然と整理された工具類



様々な工具類



組み立て終わったバイク



年中無休の看板

・創始者のピーター・スコットさんは、「人工的ではあっても、都市部に湿地を再生すれば、野鳥の楽園になる」という実証をしたかった。実際に、野鳥の生息はすぐに復活したが、小動物の復活は難しい。

・野鳥のためにはどのような植生 (Wetland Community) がよいのか研究し、人の手で植えた。ヨシやガマの繁殖が強く、植生が変わってしまうので、人手でコントロールしながら、自然の形に任せたい。(写真①)

多く手を入れすぎると、生き物が混乱してしまう。イギリスにも原生の自然はほとんど残っていない。

・現在 鳥 180 種、トンボ 19 種、蛾 600 種、クモ 15~16 種を確認している。植生のモニタリングを行っているが、ボランティアの力が必要。1993 年から生態系がどのように変化していくかを調べている。

約 220 種の野鳥が生息している。しかしこの湿地センターだけでなく、周りに餌場となる農場が必要。

・観察舎ピーコックタワーからは、広々とした湿地全体の風景が見渡せ、鳥にストレスを与えず野鳥を観察できる(写真④)。牛(旧来の品種 ハイランドカウ)を 2 頭飼っている。のんびりと草を食む「移動式草刈り機」だという。センターでは、草刈は年 2 回、手作業で行っている。

観察舎内には鳥好きのボランティアガイドに出会った(写真⑤中央)。その日彼女は 2 時間の義務があるという。週 3 回ほどボランティアに来ているが、来場者へ鳥のガイドや、増やすべき野鳥の増殖(雛を育てる)といった日本ではなじみの薄い業務にも関わっているという。ジョークを交えつつ気さくにガイドしてくれた。





<感想>

・立教セカンドステージ大学 新井純孝

20世紀は、人類がこれまでにない、物質的な豊かさを手にした時代です。そしてその代償として、自然環境を大きく損なった時代でもあり、これからの100年にあたる21世紀は「環境の世紀」になるといわれています。歴史的建築物の保護を目的として設立されたボランティア団体のナショナルトラスト(National Trust)をはじめ、英国での市民社会セクターの確かさに驚かされました。

こういう下地があってはじめて移民政策等も進めることができるのだろうと、日本との違いを考えさせられました。

・立教セカンドステージ大学 三島澄子

絶滅危惧種の Redshank (赤足シギ) や Water vole (ミズハタネズミ イギリスの児童文学『The Wind in the Willows たのしい川べ』に登場) などの保護活動も行っている。7日にコッツウォルズ地方のバイブリー (ウィリアム・モリスが絶賛した村) を案内役のロビン・ヘンショウ夫妻と散策時、スワンホテル前を流れるコルン川で偶然、Water vole が飛び跳ねていくのを見ることができて幸運だった。

・湿地センターから見える、住宅街に聳えるひとときわ大きいビルはチャリングクロス・ホスピタルで、屋上にハヤブサが巣を作り、湿地にエサを取りにやってくるという。

四季折々に変化する湿地の風景はホスピタルの患者さんやスタッフにとっても心癒され

る大切な場所になっていると思われる。人も生物も本能的に水辺に惹かれて集い憩う。ロンドン湿地センターは、人工的に造ったとは思えないほど周囲に溶け込んでいる。野鳥たちにとっては羽を休める楽園であり、田園生活への憧れを持つロンドンっ子たちにとってはテムズ河と同様にすぐ近くにある水辺の自然として親しまれていくことだろう。

・ふるさと上谷沼地創造塾 貴家章子

植物や生き物の種類こそ違おうが、まさにこの風景は、沖積平野である関東平野の原風景であるように思える。ここが大都会ロンドンであることをしばし忘れる。奥山の自然も大事だが、自分の居住地の自然に親しみ、自ら関わって保全していくことは、とても重要だと思う。ここは、人手の入った自然であり、センターの建物、ショップ、野草や野鳥の見せ方、演出が非常におしゃれだと感じた。自然を守ることを経済的価値に乗せることで、世の中が動くのではないかと思う。人の心をつかみ、経済の歯車を利用することで結果として、継続した自然保護、再生に結びつくと感じた。

《参考文献》

- 渡辺豊博・松下重雄 『英国発グラウンドワーク』 春風社 2010
ジュリア・コートニー 『ピーター・スコット』 乾侑美子訳 偕成社 1993
ケネス・グレーアム 『たのしい川べ』 石井桃子訳 岩波書店 1994
鷺谷いづみ 『にっぽん自然再生紀行』 岩波書店 2010

6. 参加者へのメッセージ（小山善彦）

皆さん、その後お元気ですか。ロンドンでの研修に同行させてもらった小山です。ロンドン湿地センターでの野鳥の群れ、グラウンドワークの2人の女性が語ってくれた雨水活用型の住宅団地構想、大好きな自転車を使って弱者支援を続ける Bikeworks、ハイドパークで作業し、ロンドン動物園のキリンのための飼料を作って体操した2時間。一緒に過ごした時間が懐かしく思い出されます。

今回の研修は「市民社会セクター」がテーマでした。つまり、行政の外側で公的活動を担う市民サイドの団体ですね。皆さんのメモを拝見すると、多くの方がこのセクターの活動を積極的に評価されていることに力づけられました。とくに、地域の文化、価値観、住民の思いや考え方、チャンスや希望、所有意識や自立心など、地域再生に欠かせない根本的な部分に目を向けられているところに感銘を受けました。そして、日本でのNPOや市民社会への思いを語られている方もありました。

今回の研修では、皆さんに2つのことを感じとって欲しいと思っていました。1つは、公共課題の解決は行政の独占物ではなく、さまざまな方法で対応できるということ。日本では行政任せの部分が圧倒的に多く、1つの主体、1つのアプローチでやるしかないと考えがちです。しかし英国ではまさに雑多。さまざまな性格の団体がアイデアを出し合い、解決策を競い合い、連携して行動する。資金源や人材・ノウハウの流れも多様です。

もう一つは、公共担い手の重心が、行政から徐々に市民社会セクターにシフトしつつある点です。その背景には行政の資金難があるわけですが、それ以上に、市民社会の能力や責任感、当事者意識などを高めないと、これからの公共課題の解決は難しいことが理解されているからだと思います。

日本では公共セクターと企業セクターに比べ、市民社会セクターの存在感は圧倒的に劣ります。NPOの数は確かに増えてはいるのですが、プロとして仕事をし、生計も立てられる人はほんの少数です。このセクターが力をつけ、3つのセクターのバランスがもう少しよくなれば、日本社会の雰囲気もかなり変わらなうと思うのです。日本人の能力をもっともっと引きだせらなうと思うのです。

皆さんはどう思われますか？日本にしっかりした市民社会セクターが必要だと思いませんか？どうすれば力強い市民社会セクターが育成できると思いませんか？

7. 講評（渡辺豊博）

英国に行くためには、飛行機代や宿泊費、旅費、飲食代など、30万円近くの経費が必要となる。今回の英国視察の参加者の多くは、都留文科大学を中心に立教セカンドステージ大学などの学生たちである。資金的な負担は、かなりのものであつたと思う。多分、参加の前提は、資金的な負担が一番大きかつたのではないかと推察している。

しかし、参加者は、この制約・ハードルを、アルバイトの強化やサークルなどの日程調整、両親の理解取得などを行い、最終決断をしたと思う。各人が報告書の感想で述べているように、英国での雰囲気や先進性を感じ、学び、国際的な観点からの刺激を受けている。彼らの参加の決断と問題意識、勇気に敬意を贈りたい。

今後、この参加の決断が、それぞれの今後の人生の中で、貴重で刺激的な経験知・体験知として、何らかの効果と影響を発揮してくれると確信している。また、英会話への抵抗感の払拭を含めて、社会的な視野が地球規模となり、行動範囲や関心事が大きく飛躍し、

拡大していくことを期待している。

英国のしたたかさや国家運営の戦略性、NPO との協働の仕組みを拡大することによる効率性を追求する行政や政治の狡さ、地域を運営する主役は市民だとの自信とプライド、真の市民社会の補完システムの有益性など、日本の中で複雑化する社会問題に対して、多様で先進的な対応策・対策を学べたのではないかと考えている。

今後は、この刺激と感想・感動を、いかに劣化・陳腐化しないままで、持続・維持させて自分の潜在的な知識として、実社会の中で活用・応用していけるのかが、大きな人生の課題・宿題といえる。今後の参加者の活躍と発展を強く願う。本当に、ご苦労様でした。「痛風」発症のために英国の美味しいビールを飲めなかった渡辺より。